

栃木県結核・感染症発生動向調査情報

(サーベイランス)

令和3(2021)年 10 月(週報第 40 週～第 43 週(10/4～10/31))集計の感染症発生動向調査情報に関する解析結果は次のとおりです。

1 感染症解析情報 {10 月は4週間、9月は5週間、前年同期は5週間での比較となります。}

(1)概況

ア. 10 月の報告数は次のとおりです。全数(1～5類等)把握疾病は、**242 件**(9月 **2,223 件**)でした。定点把握疾病のうち週報疾病(インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、基幹定点の週報)は **512 件**(定点あたり **2.99 件/週**)であり、9月の **665 件**(定点あたり **3.21 件/週**)と比較し、週あたり **0.93 倍**とほぼ同様の水準で推移しています。

イ. 栃木県において報告が多かった主な疾病は次のとおりです。(定点把握週報疾病)

疾病名	報告数	前月との比較 (週あたり比)	前年同期との比較 (週あたり比)
感染性胃腸炎	204 件 (週あたり平均 51.00 件)	↑ (1.34 倍) 前月は 190 件 (週あたり平均 38.00 件)	↑ (1.36 倍) * 前年同月 188 件 (週あたり平均 37.60 件)
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	80 件 (週あたり平均 20.00 件)	↑ (1.15 倍) 前月は 87 件 (週あたり平均 17.40 件)	↓ (0.81 倍) * 前年同月 124 件 (週あたり平均 24.80 件)

- ① 感染性胃腸炎は、前月に比べ報告数が 1.34 倍とかなり高い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 1.36 倍とかなり高い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、ほぼ同様の水準で推移しています。
- ② A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、前月に比べ報告数が 1.15 倍とやや高い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 0.81 倍とやや低い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、かなり低い水準で推移しています。

(2)全数(1～5類)把握疾病情報(全国)

ア. 1 類、2 類、3 類疾病及び新型インフルエンザ等感染症

結核 1,138 件(9月 1,439 件)、腸管出血性大腸菌感染症 300 件(9月 458 件)、腸チフス1件(9月0件)、新型コロナウイルス感染症 13,647 件(9月 241,397 件)の報告がありました。他の疾病の報告はありませんでした。

イ. 4 類・5 類(上位 6 疾病)

順位	疾患名	件数	前月件数
1	梅毒	654	861
2	レジオネラ症	207	278
3	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	164	222
4	日本紅斑熱	107	60
5	侵襲性肺炎球菌感染症	69	99
6	百日咳	66	46

ウ. 栃木県では次の報告がありました。(計 242 件)

結核7件、腸管出血性大腸菌感染症9件、E型肝炎1件、レジオネラ症9件、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症2件、急性弛緩性麻痺1件、後天性免疫不全症候群2件、侵襲性肺炎球菌感染症1件、梅毒 12 件、播種性クリプトコックス症 1 件、百日咳1件、新型コロナウイルス感染症 196 件

※本解析評価は、速報性を重視しておりますので、今後の調査などの結果に応じて、若干の変更が生じることがあります。

2 疾病の予防解説

梅毒と後天性免疫不全症候群（エイズ）について解説します。

梅毒と後天性免疫不全症候群（エイズ）は感染症法に基づく5類感染症全数把握疾病です。

いずれも主たる感染経路は性行為であり、本県における、ここ数年の報告数は、梅毒は増加傾向、後天性免疫不全症候群（エイズ）は横ばいと、引き続き注意が必要です。

なお、県内の健康福祉センター（保健所）では、梅毒の検査や HIV/AIDS の検査を匿名・無料で受けることができます。予約が必要な場合がありますので、事前に検査実施場所及び日時等を、以下の栃木県ホームページで確認し検査を受けるようにしましょう。

●栃木県 ホームページ <http://www.pref.tochigi.lg.jp/e04/welfare/hoken-eisei/kansen/hp/hivkensa.html>

疾病名	原因と潜伏期間	症状や特徴	予防対策等
梅毒	梅毒トレポネーマ 3～6週間	感染経路は、感染者との性行為です。まれに血液感染や、感染した妊婦の胎盤を通じて胎児に感染する母子感染もあります。 3～6週間程度の潜伏期を経て、経時的に様々な症状が現れます。その間、症状が一時的に軽快する場合があります。治療が遅れる原因となっています。第Ⅰ期梅毒では感染した部分にしこりや痛みのない潰瘍などの症状が現れます。第Ⅱ期梅毒では、梅毒特有の皮疹や発熱、倦怠感など全身に症状が現れ、晩期梅毒では、ゴム腫、心血管症状や神経症状などが起こります。	梅毒の治療は、ペニシリンの内服が基本となります。早期に治療を始めることが重要です。 他の性感染症に感染すると、梅毒に感染しやすくなりますので、性感染症の治療は最後までしっかり行う必要があります。 梅毒の予防は、感染者との性行為を避けることが基本です。コンドームの使用は、予防効果が示唆されていますが、完全に予防できるわけではありません。特に不特定多数との性行為は避け、気になる症状がある場合には、パートナーとともに検査を受けることをお勧めします。
後天性免疫不全症候群	ヒト免疫不全ウイルス (human immunodeficiency virus: HIV) 2～3週間 (感染初期)	HIV 感染の自然経過は感染初期（急性期）、無症候期、エイズ発症期の3期に分けられます。感染初期（急性期）は発熱、咽頭痛、筋肉痛、皮疹、リンパ節腫脹、頭痛などがあり、その後、数年～10年間ほどの無症候期があります。感染後、抗 HIV 療法が行われないと日和見感染症や悪性腫瘍を発症するエイズ発症期となります。 日本では感染経路のほとんどは性行為で、まれに、母子感染や血液感染があります。	HIV は主に3つの経路（性行為・母子感染・血液感染）で感染します。この疾病を予防するためには、まずきちんとした知識や理解を持つことが大切です。 HIV の予防は、感染者との性行為を避けることが基本です。コンドームは、正しく使用しましょう。特に不特定多数との性行為は避け、気になる症状がある場合には、パートナーとともに検査を受けることをお勧めします。また、かみそりや歯ブラシなど、血液が付着しやすいものの共有は避けましょう。

(疾病の予防解説 参考) 国立感染症研究所 ホームページ <http://www.nih.go.jp/niid/ja/>
厚生労働省 ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/>
エイズ予防情報ネット(API-Net) <http://api-net.jfap.or.jp/>

※予防解説は一般的なことを記載していますので、不明な点は主治医によく相談するようにしましょう。

3 その他の参考事項

国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムにより、10月に県内で発生した警報および注意報はありませんでした。

※国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムは、過去の週ごと・保健所ごとの届出数に基づき、届出数が特に多いとき（およそ上位1%以内）に警報が発生されるよう、疾病ごとに定点当たりの基準値が定められたものです